

極微 ごくみ

日本のどこかに
最近の流行歌は、歌詞が聞き取りにくい、というが、分らないリズムとムードばかりで、歌詞はつけたしという感じである。内容が理解できないと仕方ないと思うのは、老人の繰り言だろ。古い歌でも、いい歌は新しい歌手たちがカバーして歌っている。JRが「コマーシャルソングで、いい日旅立ち」をリバイバルさせた。起用された若い歌手も、なかなかの歌唱力である。「日本のどこかに、わたしを待ってる人がいる」なんて、JRもなかなか商売上手である。なにより、詞が分かるのはい。

第8号

2003年(平成15年)
11月1日(土曜日) (毎月1日発行)
1部 50円(送料別)
発行所/天台宗出版部
〒520-0113 大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内
電話 077-579-0022(代)
Eメール/T-Press@tendai.or.jp

天台ジャーナル

The Tendai Journal

新しい流れをつくりたい

一隅を照らす運動総本部長に就任した壬生照道師

最初に一隅を照らす運動総本部長への打診があったのが9月30日。それから悩みに悩んだ。決断をうながすために、西郊宗務総長自ら長野県下伊那郡の隣政寺に足を運び、就任を懇請した時に言った。「…本当に、私のような者でいいんですか?」



壬生 照道(みぶ・しよ うどう) 師 昭和14年1月22日長野県生まれ。大東文化大学(東京)卒業。長野県飯田市の私立飯田女子高等学校で教鞭をとる。昭和36年隣政寺住職。信越教区宗務副所長を経て、平成11年10月から今年9月まで同教区宗務所長などを歴任。

寺にいて、檀家だけを相手に生きてきたわけではない。天台宗の僧侶としては、型破りだとの自覚がある。

地元の飯田女子高校を、校長で定年退職退職したのが平成十年である。「そこで、ヒラ教諭を十年、学年主任を十年、教頭十年、副校長四年、校長四年、しめて三十八年の勤続」。同高校は、浄土真宗が運営する私立高校である。さぞ、やりにくかったと思うが「そんなことはない。元をただせば、みなお釈迦様。だいたい、狭いセクト主義を意識していたら、いい仕事はできない」。その主張の結果を、校長就任で裏付けた。

寺にいて、檀家だけを相手に生きてきたわけではない。天台宗の僧侶としては、型破りだとの自覚がある。授業をサボった子を見つけたら、叱るのではなく、雑談しながら悩みを聞いていた」という「一風変わった」校長先生であった。「自分が校長時代に、退学処分にした生徒はひとりもない」。

「そのころの壬生先生は怖くて、話しかけれなかった」という証言がある。今も六十四歳にはとてもみえない眼光である。「怒る時は、ためらわない。計算もしない。ただ年を重ねるにつれて色々なものが見えるようにはなっていた。けれど、丸くはなっていない」が持論。

母校の大学から、より好条件で第二の人生を提示されていた。それを蹴ったの就任である。決意をさせたのは、今年八月に急逝した茨城教区宗務所長の光栄純秀師との約束だった。天台宗の未来を話し合う同志だった光栄所長は、ことあるごとに言った。「機会があれば、僕は、壬生さんに一隅をやって欲しいな、あなたに適任だよ」。

趣味は山歩きと、キノコ狩り。アウトドアライフの人である。「山道だって寝られるから、当座必要なものだけ車に積んでいけばいいだろう」と、大津市坂本の役員宿舎に十一月一日着任した。国語の教師だったからではないが方丈記を愛読する。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」。流れる水は同じではなく、つねに新しい水がながれている。改革に託された任期は二年である。

素晴らしい言葉たち

Wonderful Words

目覚めたら安達先生がいたんですよ。幻覚かと思ったけど、あつたかいし、涙もポトポト落ちてくる。で、ギョッと手を握って、「あなたは私の夢だから死なないで」って。ずーっと朝まで傍にいたんですよ。血を吐いたら全部拭いてくれてねえ、オシメも替えてくれて……。

週刊文春10月16日号
阿川佐和子のこの人に会いたい
「義家弘介さん」

「ヤンキー母校に帰る」というドキュメンタリー番組がテレビで放送され大反響を呼びました。このいわゆる「ヤンキー」とは、北星学園余市高等学校教諭の義家弘介さんのことです。

十五年前、不良少年で親からも学校からも見捨てられた義家さんは、里親に引き取られ、高校中退者を募集していた北海道の北星学園余市高等学校に入学し、一人の先生と出会い立ち直ります。

彼は、卒業して、大学に進み司法試験の準備中に不慮の事故に見舞われ、生死の淵を彷徨よっていた時、ふと目覚めると、恩師の姿が見えまじた。それが、冒頭の言葉です。それまで「もう死にたい、殺してくれ」と思っていた彼は、初めて、生きたい、どんなに苦しくても生きたいと思うのです。そして、自分のことを「夢」だと言ってくれた人が歩いてきた教育という道に進むことを決めるのです。

「一生懸命生きていることを、希望を見せてあげれば必ず前に進める。だから夢を与えるのは大人の仕事なのです」。母校に赴任して五年目になると義家さんは、生徒とまっすぐに向き合い続けています。



ハワイ開教奮戦記(3) 事業団発足へ

荒了寛 (カットも筆者)

海外開教に乗り出すには、まず土地建物の取得、その維持と住職の生活費が要るといふことですから、その膨大な資金の調達、支援については一宗あげて協力してもらわなければならない。しかし、当時宗内は比叡山大学の設立をめぐって推進派の西と反対派の東に分かれて対立しており、いわば反対派の急先鋒であった羽場大僧正がハワイ開教の必要を訴えても、西側の賛成を得ることは困難な情勢でした。

また、宗議会のような宗の

正式機関の審議にかけて事業を進めるといやり方は、このような新しい事業を効率よく進めるのは難しいという判断もあって、天台宗国際協会、或いは海外協会のような支援機関を設立して、独自にこの事業を推進しようということになりました。

勿論、羽場大僧正は、宗議会議長をされたほどの方でしたから、こうした構想ははじめるからといっておられたと思われませんが、かなり厳しい宗内事情の中でハワイ開教の計画を進めなければならぬことは、私にもひしひしと感じられました。

しかし、寛永寺の杉谷義周大僧正、深大寺の谷堯昭大僧正、それに羽場慈温大僧正が名をつらねて一宗に呼びかけ

鬼手仏心

人はゴミではない

天台宗宗務総長 西郊 良光

またか、と思う。
神奈川県で、小学校六年生の児童らがホームレスの男性を襲い、けがをさせたとして補導された事件だ。
少年らは「ストレス解消のためにやった。社会のゴミを退治する感覚だった」と話しているという。日本には、弱者のことを思いやる「惻隱の情」という言葉がある。誰が段ボールやブルーテントを家とし、猛暑や極寒の中を暮らしたいと思うか。路上に暮らす人々には、それなりの苦しい事情がある。
そこに今の日本がおかれ

ている縮図がある、といつても、彼らの事情を推し量れといつても、それは小学生には無理かもしれない。しかし、それにしても人間をとらえて、ゴミ退治とはなんということか。
私たちはいのちのあるものは人間はもちろん、草木にいたるまで「ほとけの子」として尊ぶことを学んできた。

き私たちの努力が足らぬ事実として、痛く胸を刺す日本は、ここ数十年、追いつけ、追い越せを至上として進んできた結果、恥を知る文化を失ってしまった。その結果、自己の利益こそが最終目的になってしまい、いじめなどに端を発した精神の荒廃は、あつという間に私たちが日常生活で、身の危険を感じるまでに膨れあがってしまった。
人間は、本来、助け合つて共に豊かに生きてゆくべきである。宗祖の説かれた「己を忘れて他を利する」とはそういう意味である。

密教展で資金集め

「ハワイ行き」を覚悟してからは、何かにつけて頻繁に羽場大僧正にお会いし、私はこつこつとした計画やアイデアを逐一報告し、進め方を相談しておりました。

ある時、私は「こういう製品を専門的に扱う事業団のような組織をつくってはどうか」と提案しました。宗教団体ですから、寄付とか拠出金にたよるのは当然かもしれませんが、この場合、何かの収入になるような「事業」によって資金をつくることも必要と考えたからです。

「事業団」とは、その頃、原子力事業団とか、宇宙開発事業団といった名をよく新聞などで見ていたので、自然に口から出た言葉でしたが、羽

場大僧正は感心して、「事業団か、それはいい」ということで、仮称「天台宗海外協会」は「天台宗海外伝道事業団」でいこうということになりました。

事業団はじめてのプロジェクトとして企画したのが「天台密教展」でした。これは、例えば金剛界マンダラを大型のマルチスクリーンに成身界、三昧耶界、微細界など順々に、部分的に映したり、一部を拡大したりして、マンダラのしくみを映し、そのシステムと思想を考える「動くマンダラ」をつくり、これをマンダラ展の目玉に全国を巡回してはどうかと考えたわけです。どうしたらそういうスクリーンがつけられるか、ヒント

になったのは、近鉄奈良駅の展示館に備えてあるマルチスクリーンで、その「しかけ」を見るために何度も奈良に出かけました。電通の専門部門を訪ねて相談したりもしましたが、まだデジタル技術もない時代、マンダラを動かして見るといふような技術はコスト的に不可能なので諦め、結局は従来の金剛界、胎藏界マンダラを中心に、それに詳しい図解を加えるということになりました。

この企画には共同通信の事業部の松田部長がのつくれたので、共同通信社、天台宗海外伝道事業団共催で、北は札幌から南は九州まで主要都市の百貨店を巡回する計画がたてられました。入場料と複製

るわけですから、延暦寺、日光輪王寺をはじめ、大寺や有力者は殆どその趣旨に賛同することになり、実質的に一宗あげて協力体制が次第に整っていきました。

一方、私自身もハワイに渡つてからの生活などに不安はありましたが、化学会社の開発などを担当していた経験と人脈を生かして、資金を作る方法はないものかと、宗内とは別の分野からの支援策に取り組みました。

その頃、化学工業界は高分子化学万能といった時代で、次々に新種の合成樹脂が生まれていました。それらの樹脂を使って、新しい建材や機械部品などが作られていくので

すが、そういう樹脂や形成技術をつかって仏像のレプリカなどをつくると、実に見事な製品ができました。明珍氏はその技術で、国宝級の仏頭など、本物そっくりの複製品を販売していました。

この技術で宗内の国宝的な仏像などの複製品をつくれれば、開教師の生活費ぐらいはなんとかなるだろうと考えたわけです。

もう一つ、私が注目していたのは、共同印刷の開発室がアメリカから導入した印刷技術でした。この技術を使えば、布地のような柔らかいものにも精巧な印刷が可能で、マンダラなどを複製するには最適な方法でした。この技術を

使つて製作したのが、京都・青蓮院の青不動図でした。



京都・青蓮院の青不動図(部分)

製仏像、複製マンダラや仏画の販売でいくらかは事業団の収入になるはずでしたが、私はその実施前にハワイに渡つたので、その実際を見ることはできませんでした。

主催名義も、どういふ経過であつたか、事業団ではなく「一隅を照らす運動総本部」となりました。「一隅を照らす運動」として密教展が開かれたことは、それはそれで大きな意義があつたと思えますが、このプロジェクトの原点は、どうにかしてハワイ開教の資金をつくらうということから、今後の参考のために記憶しておいて頂きたいのです。

事業団は、別院が開創されてからは阪急交通社と提携し、ハワイ別院参拝団を送る事業を通じて、その名の通りその役割を大いに果たすことになりました。それに従つて「事業団」という呼び名も宗内に広く定着するようになりました。

なぜ宗教教育はできないのか？

天台宗総合研究センターが主催するシンポジウム「こころの教育を考える」が、十月七日に大正大学で開催された。このシンポジウムを計画したのは、センターの第二部会（村上圓庵主任研究員）。シンポは第一回目。コーディネーターをつとめた村上興匡研究員は「天台宗の機関で、なぜこのような研究をといえ、僧侶の多くが『宗教教育がなくなって、現今のような混乱が起きている』と感じているからだ」とし、どうしたら宗教教育が出来るかではなく、どうして宗教教育ができないかを考えた」と問題提起した。



柔らかな教育空間が必要（山口）

山口パネリストは「公立学校と宗教をめぐる教育法的課題」として「教育の現場は、多様な価値観が存在する。私学といえども、助成金等国家から独立していない。教育基本法で特定の宗教の教育は禁止されている。それならば、特定でない宗教は存在するのか」と語り「現在では宗教教育を行おうとすれば、国の助成金などに頼ることのない私塾のような形しかない」として、アメリカなどでの実例を紹介した。

が、他の生徒がベールを被っていないから、はずすように学校から強制されるという例があるし、日本では、宗教的理由で剣道を否定した高校生が単位をもらえないという事件があった。価値の違いを尊重することが必要だ。柔らかな教育空間が日本に無いことが問題だろう。社会で見放された子どもたちがたくさんいる。逆に、宗教は今の子どもを抱える問題にどれだけ応えているかが問われている。マザーテレサのように、見放された人に手を差し出すことが、社会的理解につながってゆく」と教育現場での問題点を指摘した。

いのちの教育

（小川）

続いて小中学校の教頭・校長を歴任した小川パネリストは「学校管理者としての経験から人間が人間らしく生きるために変わってはいけない部分がある。そのことを教えなくてはならない。たとえば、大自然の恩恵を忘れることはできないし、大気、水、土が生命を育てていることを知らしめねばならない。そうして宇宙を大事にすること、生命を受けたことの感謝を忘れないよう指導しなくてはならない。特に水は大事であるし、ゴミや汚染は人間の努力

によって減らすことが出来ることを実践させることも必要だ。中学校で力エルの解剖を指導したとき、私は、神仏のことは一切話さなかった。ただ、生命を奪うことについて皆さんの気のすむように、自分の信ずるところによって祈りなさいと言った。こころの教育というが、いのちの教育

社会の急激な変化と宗教（大谷）

更に大谷パネリストは「宗教的教材を扱った高校公民教育」として倫理を教えている立場から「若者たちの自分探しに宗教、学校、教師はどのように応えているかが問題」と語った。「オウム事件で、宗教は怖いというイメージが社会に固まった。かといって、既成宗教は悩める若者の受け口にはなっていない。社会の急激な変化と伝統宗教のかみあわなさがある」と指摘。若者の宗教的関心の分析不足や、宗教学習がなされていない現状を語った。特に「生

とみれば道が見えるのではないか。つきつめれば、生命と環境のことであって、表裏一体である。スーパーで売っているものでなく、実際に鶏をつぶして鳥鍋にした子どもたちの感想は『かわいそうで涙がでた、ありがとうと思う』というものだった」と述べ、宗教教育という言葉こそ使わなかったが、会場からは「それこそ、宗教教育そのものだ」という感想が聞かれた。

倫理には、思想的文化的背景を抜きにしては語れないし、先端医療の発達で惹起された問題は、宗教の知識なくして理解できない」との見解を示した。

最後に村上コーディネーターは「この問題に対して、宗派としてのトレーニングが必要、宗全体で共有できるシステムづくりが急務である」とまとめた。

お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。また、取材について「こんな出来事、あんな人々」をお知らせ下さい。

封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。連絡先は、題字横です。

FAXは、077-578-4814



パネリスト
山口 和孝 埼玉大学教育学部教授
小川 雅康 元大府市立大府小学校校長
大谷 いづみ 東京学芸大学教育学部付属高校大泉校舎教諭
コーディネーター
村上 興匡 東京大学大学院人文社会系研究科助手

左から大谷・小川・山口の各パネリストと村上コーディネーター

